

## 冬の子ども

白鳥美智子



ときに雪国を訪れる人は、雪に幻想とロマンを感じるようですが、そこに住む人にとっては、雪は「白魔」と呼びたくなるような気持ちにさせるものようです。ご主人の転勤ではじめて雪国に住んだ暖国育ちの奥さんが、最初の冬は嬉々として「雪ってすてきね」といつもおっしゃっていましたが、二冬目になると雪の讃辞がお口から出なくなり、三年目の冬には雪が降るごとに忌むらしいものでも見るような表情で、しきりに暖地への移転を望んでいらっしやっただのを思い出します。

東北の冬は長く、きびしく、ことに農村部にある幼稚園では、積雪や道路の凍結などで園児の通園の安全にはことのほか気をつかいます。また、初冬から春先にかけては、安達太良おろしの季節風が吹きつり、戸外での遊びは、なかなか思うにまかせません。でも子どもたちは、周囲の大人たちの、そんな

こんなの懸念などんちやくせず、風の切れ目をぬうように戸外にとび出しては、ほおも手も真つ赤にして、時には風に堪えているかのようにうずくまっつて、なにかいっしょうけんめいに凍りついた土と格闘してみたり、また時には、まるで風に舞う枯れ葉のように風に吹かれるままに園庭中を右往左往してみたり、まったく屈託のないありさまには、なにか不思議な生きものを見ているかのような気分になっつてしまっつてことがあります。

雪が降り積もりますと、それはもうたいへんなはしゃぎようで、園庭はそれこそ「修羅場」と化してしまっつてます。グループで雪をかき集めてカマクラをつくろうとする子どもたち、雪の小山をつくつて、板きれでもダンボールの小箱でも、これは滑りそうだと直感したものは何でも手あたりしだいに探し集めてソリすべりをする子どもたち、雪球をつくつて、だれかれの見境なく投げつてみたくなる子ども、周りの騒ぎに「我関せず」と超然として、黙々と独り雪の造形活動に打ち込む芸術家、大きな雪だるまをつくつて、それに体当たりをして、こわれると大歓声をあげては、もつと大きいのをつくつて挑戦する、末はお相撲とりかプロレスラーかの金太郎くん。風が吹い

ても雪が降っても、子どもが遊びに困るようすはまったく見られません。風が吹けば吹くように、雪が降れば降るように、子どもたちは遊びを造り出します。ほんとうに子どもは遊びの天才ですね。大人が寒さと白魔に気圧されて、陰うつな顔をしながら逼塞<sup>ひつそく</sup>している冬が、子どもにとっては新しい遊びとの出会いを経験するゾクゾクするような興奮の季節なのです。

二月、といえはもう春の気配が感じられる、というのは暖地でのこと。雪国ではまだまだ冬將軍の強力な支配がゆるみません。雪をかきわけて山中にクマを求める猟師の話では、牝グマ

## 冬の自然

加藤 幸子



北風が吹き初めるころになると、武蔵野のはずれにある薬用植物園からは、富士山を中心に丹沢山塊や奥多摩の山々が見えるようになります。夕焼けの空に、山波がシルエットとなつて浮かび出すころは、特に美しく、思わず、帰宅の足を止めて、見とれてしまいます。冬といえは、この夕暮の風景がまず、心

は穴ごもりをしている間に出産をするそうです。この厳寒期のきびしい条件のもとで子グマを生み、そして雪解けとともに子グマを連れて山野を歩きはじめるのだそうです。そんな話をふと思い出して、いまは赤ちゃんグマがまだお乳を含んでいるころだろうか、それとももう、ころころと遊びはじめたかななどと想像しながら、雪の中を小犬か小グマのように夢中になってはしゃぎまわっている子どもたちを見えていますと、雪国の子どもたちもつとも成長するのは、もしかしたら冬の間ではないかしら、と思ったりもしています。(福島・わかきさ幼稚園)

に浮かんでいきます。しかし、夕暮の華やかさとは反対に、晩秋から初冬にかけては、植物を扱っている者にとって、何ともわびしい季節なのです。初霜が降りて、南方系の植物が、夏の残り花をつけたまま、一夜にして枯れはててしまうのもこの頃です。梢に残った数枚の葉が北風にくるくる舞うころは、枯れた草や枝を集めてたきながら、いよいよ本格的な冬だと感じます。植物園を訪れる人も少なくなり、ひっそり閑として、私たちも一年間のたまった事務仕事を片づけながら、ひたすら春が来るのを待っています。